

くにたち しらべ



NO. 22

発行日 2018 年 9 月 3 日

編集＝くにたち地域資料ボランティア

発行＝くにたち中央図書館

テーマ

『むかしの遊び ～「国立の生活誌」を中心に～』

子どもは遊びの天才といわれますが、時代や環境によって遊びの種類や内容がずいぶん変わります。パソコンやゲーム機、電池を使うおもちゃなどのない時代、買ったおもちゃで遊ぶ習慣のなかった戦争（第二次世界大戦）が終わるころまで、この国立で子どもたちはどんな遊びをしていたのでしょうか。

当時の谷保村（現国立市）は甲州街道に沿う集落で、家々の後ろには畑、多摩川近くには水田が広がっていました。

国立市民具調査団（現国立の暮らしを記録する会）による古老の聞き書き集「国立の生活誌—古老の語る谷保の暮らし—」と、水の懇談会による「くにたちの水循環市民プラン」では、谷保のおじいちゃん、おばあちゃんたちがこどものころをふりかえって貴重な話をたくさん聞かせてくれています。以下、枠に囲まれた部分は、これらの聞き書き集から、極力原文に近い形で抜粋・編集したものです。

1. 自然の中で遊ぶ

自動車もあまり通らない時代、雨の日やとても寒い日などをのぞいて外で遊ぶのが当たり前でした。女の子は縁側や庭先で遊ぶこともあったようです。学校に行くときは部落*ごとに集団で行きました。遊ぶのもみんな団体行動で、教わらなくても上の子のやり方を見てまねて自然に覚えたといいます。

*甲州街道に沿って立ち並ぶ家々は、「部落」といわれるいくつかの地域（グループ）に分かれていました。千丑・石神・久保など今でも集会所の名称などで残っています。

1) 学校での遊び

朝礼の鐘が鳴るまでの朝の時間、休み時間、お昼休みに放課後と、子どもたちは学校でも工夫を凝らして遊んでいました。中には授業中でも、先生の目を盗んでこっそり遊ぶ子や、いたずらをする子もいました。

「木とり」は、大きな木を目印に紅白に分かれ、早く相手の木にタッチした方が勝ち。「片足対抗戦」は、片足上げてぴょんぴょん跳んで相手を倒す。女の子はお手玉、あやとりや石けりが多かった。

ベースボールは友達同士を二つに分けてやるボール遊びで、野球に似ている。軽いゴムマリを手で張って（打って）駆け出すと、守っている相手方がボールを拾って走っている人にぶつける。走っている人は上手にボールをよけて、三カ所の塁を踏んで元の所へ帰ってくると一点。人数にかまわず、大勢で遊べた。



(図1 片足対抗戦)

昔の学校にも遠足はありました。学校生活の一大イベントで、たとえ行く場所が近くの多摩川でも、遠足の前にはみんなわくわくと胸を躍らせたものです。

1年生の時は国立市内を一周する。2年生になると百草から高幡まで歩いた。あとは井之頭公園に行ったくらい。ふだんでも多摩川を越えて高幡や百草まで歩くのが遊びだった。遠足とか運動会は毎年やらなかった。江ノ島に行くはずの修学旅行も景気が悪いと中止になった。

2) ふだんの遊び

凧やコマ、竹馬などのおもちゃも、竹を切って針金を買って自分たちで作りました。お小遣いはお祭りの時以外は貰いませんでした。おもちゃも今のように売ってはいなかったのです。

チャンバラごっこ、凧揚げ、タカアシ（竹馬）は庭の広いところで近所中集まってやる。いくさごと（戦争ごっこ）や兵隊ごっこもやった。いろんないたずらもした。女でも竹馬はよくのった。家に竹やぶがあったから切って来て自分で竹馬を作った。そして乗りながら右と左の持ち手をコツコツとこすりあわせる「カツブシカキ」という乗り方をよくした。



(図2 竹馬・タカアシ)

家の中の遊びは、いろはかるた、百人一首、双六。ミカンはめったになかったから、ミカンの代わりにキンカン釣りをした。木綿針に糸を通して、上から投げて、キンカンを釣り上げる。釣ったのは食べられた。

たくさん遊べばおなかも減ります。おなかが減るとおやつを食べていましたが、そのおやつも買ったお菓子などはほとんどなく、自分たちで調達したり、作ったりしていました。

サツマイモやジャガイモ、それに餅^{もち}を冬にいっぱいついておいて4月ごろまで水餅にして食べたり、小さく切って干してあられにしたりした。余ったご飯があればうどん粉（小麦粉）と重曹^{じゅうそう}を入れてこねて焼いて食べた。お焼きといった。ヨカヨカ飴屋^{あめ}が太鼓^{たいこ}叩いて売りに来ても貧しい家は買えなかった。

*飴を刺した台を頭にのせ、太鼓をたたき「よかよかどんどん」とはやしながら、飴を売り歩いた。昭和初期まであった。

夏は朝から晩まで多摩川で遊んだ。お腹がすくと近くの畑^{じゅんぐ}から食べるだけのジャガイモを掘って焼いて食べた。自分の家も含めて近くの畑を順繰りに掘ったので、あまり怒られなかった。祭りに1銭^{せん}か2銭の小遣い^{せう}をもらって駄菓子を買うのも楽しみだった。

野原ではパッチン（バタリ）やセンバハゴといった罠^{わな}をしかけて鳥を捕ったり、昆虫等の生き物を捕ったり、草花で遊んだり、色々な遊びをしていました。食べられる昆虫や木の実はおやつに食べたり夕飯のおかずにしたりもしました。

鳥っこ取りを、好きでやっている子は結構いて、雪が降ると寒いのに飛びだして、何羽とれたといていた。ハゴに鳥もちを柔らかくしてつけて、竹筒^{つつ}に入れて持っていく、鳥とりに使った。（センバハゴの）ハゴとは、竹のヒゴのことをいう。イナゴも子どもたちがよく捕った。ハウロク（素焼きの平たい土鍋）で煎^いって煮ておかずにした。頭が良くなる薬といわれて食べた。



（図3 パッチン・バタリ）

ホタルとりもした。ヤマブキという大きなホタル（ゲンジボタル）、そのあとに小さなキツネッポタル（ヘイケボタル）が出て本当にきれいだった。



（図4 センバハゴ）

イタドリやモチグサ（ヨモギ）、野イチゴ、ドドメ（桑^{くわ}の実）などをよく摘んだ。

草花遊びではトッカンバナ（ホタルブクロ）をたたいて音を出す。レンゲやクローバーで首飾りや腕輪を編む。柿や椿の花も糸に通して首飾りに。麦わらで蛍かごを編んだり、麦わらストローでシャボン玉を吹く。カヤツリグサやオオバコで遊ぶ。ジュズダマや小豆、エゴの実でお手玉づくりをした。紙テッポウはシノダケで作り、玉は花のつぼみか茶の実でやった。笹の葉っぱで笹舟作ったり、笹の新芽で亀を編んだ。



(図5 ホタルブクロ)



(図6 カヤツリグサ)

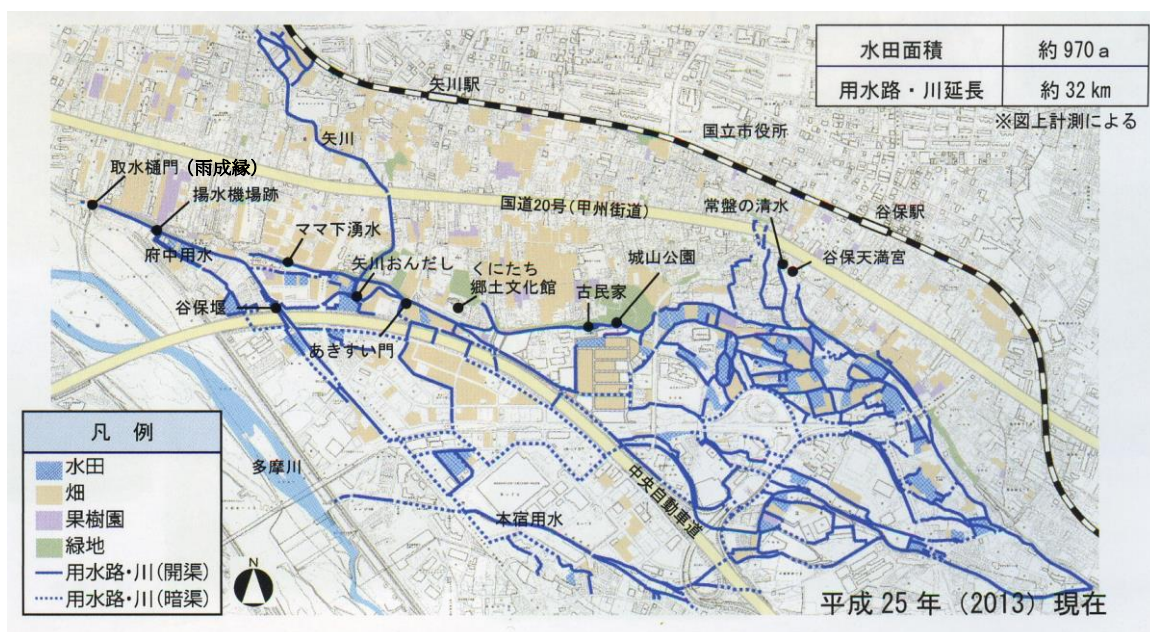


(図7 ジュズダマ)

3) 水遊び

多摩川に矢川、湧き水など、水に恵まれていた谷保村の子どもたちの夏の楽しみはなんと言っても水遊びと魚とりでした。

男の子も女の子も一緒に遊んだ。魚とりも実益を兼ねていた。みんなパンツもはかず泳いだ。少し大きくなった女の子は腰巻をして泳ぐ。場所は雨成縁（多摩川の用水取り入れ口）や、ハケの下の川、おんだし、矢川、用水などで、多摩川は大きくなるまで危ないといわれた。



(図8 市内の水田・用水路・川)

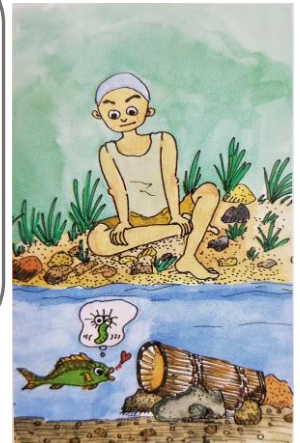
魚捕りでは遊ぶだけでなく、捕った魚をおやつにしたり、おかずにしたりして食べることもありましたが、女の子も男の子もみんな夢中になって魚を追っては、素手で捕ったりすくったり、自分たちで手作りした釣竿や仕掛けを使って、たくさんの魚を捕りました。



(図9 どじょうすくい)

女の子は魚すくい。フナやドジョウ、ハヤ。サワガニも捕った。男の子は魚釣り。多摩川でよく釣ったのはあゆだが、6月1日の解禁日までは釣ったらおまわりさんにつかまる。

うなぎ、なまず、^{こい}どじょう、ふな、はや、げばち、いたぶな（タナゴ）が捕れた。鯉はほとんどいなかったな。たまにいと人気があってどこで捕ったか聞かれた。ある時農業試験場に行って鯉の卵をもらってきて育てたら、大雨で流された。その年は鯉が沢山捕れたな。おばば（ホトケドジョウ）もたくさんいた。大きなカラスガイやゲンゴロウ、タガメもいた。タガメはカップっていった。大きかったよ5～6センチもあるくらいね。



(図10 ど)

ウナギは流し針で捕った。太いドジョウをたくさん捕ってきて「ど」^{きじょうゆ}に入れておくと捕れる。川魚は全部生醤油で煮て食った。

学校から帰ると私たちは毎日のように多摩川に通ったね。夏は水あびをしたり、魚捕りをしたりね。釣りは勿論^{もちろん}だけど、石ぶっつけや、手づかみでも捕れたっけ。竿は手頃^{しの}の篠を切って、わらを燃やして、その火であぶって油を抜くと、長持ちするんですよ。なにしろわいわい言いながら、竿も糸もみんな自分たちで作って使ったんだから、愛着があったですよ。

水に関係するこどもの遊びについては、平成15～16年ごろに「国立市水の懇談^{こんだん}会（注）」が聞き取り調査をしています。民具調査団の時より少しあとの話です。小さな谷保村の中でも、住む地域が違えば水の遊び場も違います。地域ごとにどんな水遊びをしていたのかみてみましょう。



(図 11 国立の昔の地域名)

〈久保地域〉

- ・遊びは何と言っても川遊び。ママ下より多摩川に行った。パンツだけで家から砂利道をタッタッタと走っていく。箱眼鏡を口にくわえて、篠竹に5寸釘で作った手製の鋸^{もり}で突く。黒いチューブのゴムで勢いをつけて突くのもやった。3本鋸、5本鋸もあった。絹糸を縫^よって投網を編んだ。俺たち子どもは唐傘網^{とあみ}という800目くらいのものを編み、出来上がったのは柿渋に漬ける。おもりも手製でほとんど1年がかりで作ったが絹なのですぐ破れる。
- ・多摩川では、並んで釣り糸を垂らす人の下に潜^{もぐ}って、糸を全部ひとまとめに縛^{しば}って逃げる。みんな糸が絡^{から}んでしまい、次に行くと「コラッ！また来たなっ！」と怒鳴られたが面白かった。

〈下谷保地域〉

- ・子どもたちは泳ぎを荒田^{あらた}のたまり*で覚える。だんだん泳ぎが上手になってくるにつれ、砂利場、多摩川へと泳ぐ場所を変えていくんだ。

*江戸時代初期に起こった多摩川洪水の後にできた沼地。現在の北多摩二号水再生センターの辺りにあった。現存していない。

〈南区地域〉

- ・遊びといったら、何と言っても多摩川だな。いつも川で遊んで魚を捕ったりしていた。初めて泳ぎを覚えたのも多摩川だ。深いから危なかったのでは？そんなこと無いよ、兄弟と一緒にだからちょっと手を離しては、すぐ戻ったりしてだんだんに泳げるようになる。

〈坂下地域〉

- ・川でたらいに乗って遊んだ。水で身体が冷えてくると田んぼに行って浸^{ひた}かって暖めた。

2. 地域の行事の中で

地域の行事は今よりもっとたくさんあり、大人も子どもも一緒になって参加しました。

正月に始まりえびす講や初午^{はつうま}など、その日は赤飯^{あかひ}を炊いたり行事ごと^{ちそう}の決まりのご馳走^{ちそう}を作ったそうです。小正月のどんど焼きと、塞^{さい}の神のお祭りは子どもの楽しみな日でしたが、中でも子どもの心に残っているのは「おかがら火」のようですね。



(図 12 おかがら火)

1 1 月 3 日はおかがら火。(谷保天満宮でかがり火^たを焚いて) その火にあたれば悪病にかからない(といわれていた)。(小学校の) 3 ~ 4 年生くらいから高等科の男の子が中心になって、夏休みの前から荷車引いて、(立川の) 砂川のほうまで行った。「おかがらび(火)一のまきくんない、おかがらび(火)一のまきくんない」って言いながら、日曜にガラガラ(荷車を引いて)弁当持ってみんなで行った。どこの家でも根っこをためて



(図 13 おかがら火のまき集め)

おいて出してくれた。お金をくれる家もあった。まきは部落ごと^{けいだい}にためておいて、おかがら火の前日に天神様の境内に運んで積む。上谷保、下谷保と分かれて上に立てた幣束^{へいそく}*が早く落ちた方が負け。「上谷保負けたい、下谷保勝つたい」「下谷保負けたい、上谷保勝つたい」と、周りを歩きながらはやす。勝っても褒美^{ほうび}も出ないが、おれらが勝つたと喜んだ。まきの積み方が一番大事。

*神社でお払いなどに使う紙でできた飾り。

3. 遊ぶ前にやること

どの子も学校から帰ると家の仕事を手伝うのは当たり前でした。農繁期^{のうはん}になると大変。小さな子どもたちさえ働く一員として力になったのです。当時は兄弟姉妹の人数も多く、6 ~ 7 人いるのは当たり前で、子守りは上の子がやるものでした。



(図 14 子守り)

小学生でも少し大きくなると家の手伝いで学校を休んだりする。試験だといっても勉強なんかできない。蚕かいこの世話、田植え、麦こき。休んだ日は朝から晩まで働かされた。遊ぶ時も弟や妹をおぶって子守をしながらだった。小学生の途中でやめて仕事見習いに出る子もいた。

当時、家の仕事の手伝いの中心は女の子でした。

学校から帰るとおばあさんと雑巾を縫ぬったりして裁縫さいほうを習った。機織はたおりの糸をつないだり、鶏にわとりの餌えさやり、掃除、風呂の水汲くみ（井戸や川から運ぶ）と、勉強は宿題が出なければするもんじゃなかった。学校の昼休みに家に帰って手伝ったりした。子守りをしながらミルクを作って飲ませたりして、母親代わりに妹を育てた。子守りが終わると、夏は蚕の糸引き、冬はその糸で織った布で裁縫をして、遊ぶ暇もなかった。

一方でそれを乗り越えてたくましく遊ぶ子もいました。

何しろ子供の時からよく家の手伝いをしましたが、遊ぶのも遊びました。赤ん坊おぶってたってかまやしない。ととこ、ととこ、かけ歩いて、かくれんぼもするし、見っこなんて言って、学校のこっちの端はしと向うの端とで、顔を出して誰誰って名前言ったり、陣取りじんともしました。背中になにもついていないと城山の木に登って「思いっきり歌おうね」って、大きい声で歌いました。

4. 子どもはやっぱり天才

自然がまわりにたくさん残っていて、そこで集団で遊ぶのが基本でした。子どもは遊びの天才。仲間が集まり、いろんな工夫をして遊びを発展させる面白さがあったようです。年齢の異なる集団で、年長者は年下の子をよく見てまとめる力をつけていきます。水泳のように泳げない子も怖い思いをしながら自然に泳げるようになり、危険きけんを避ける知恵も学んでいきます。おもちゃも買うものでなく、みんなで作って遊ぶのが普通でした。

おしゃれな街というイメージがある現在の国立市からは想像もつかない風景が、思い出の中に広がっていることに驚きます。今より貧しかったのかもしれませんが、その中で子どもたちは工夫を凝こらして遊び、楽しみました。遊びながら自然に生きる上での知恵をたくましく身につけていったのかもしれませんが。

今は遊べるような自然はないと昔をうらやましく思ったかもしれませんが、少し気をつければまだまだ残っています。例えば一橋大学、近くの公園、矢川やママ下湧水、府中用水にはきれいな湧き水が流れザリガニや魚たちも泳いでいます。

おじいちゃんやおばあちゃんなどが田舎に住んでいる方は、遊びに行ったときには秘密の遊び場を探してください。子どもは遊びの天才、という言葉は今も生きています。

【参考資料】※ 内は中央図書館での請求記号

- ・『国立市文化財調査報告 国立の生活誌Ⅰ～Ⅳ、Ⅵ』くにたちの暮らしを記録する会／編
Ⅰ:1983年、Ⅱ:1985年、Ⅲ:1985年、Ⅳ:1986年、Ⅵ:1988年 10/D1
- ・『くにたちの水循環市民プラン - 水循環基本計画策定に向けた市民調査と提案 - 』
国立市水の懇談会／編 2007年 10/S2
- ・『谷保』 百周年記念協賛会記念誌編集委員会／編 1974年 10/O2
- ・『くにたちの小さな仲間たち』 国立市教育委員会／編 1991年 10/Q8
- ・『企画展「くにたちの年中行事」四季の祈り〈秋から冬へ〉』
くにたち郷土文化館／編 2003年 10/P4
- ・『くにたちの水田と用水』 国立市生活環境部産業振興課／編 2014年 10/Q0

図1、2、13、14 : 「谷保」より転載

図3、4、9、10 : 「くにたちの小さな仲間たち」より転載

図5、6、7 : ロイヤリティフリー写真を転載

図8 : 「くにたちの水田と用水」より転載・加筆

図11 : 「くにたちの生活誌」より転載・加筆

図12 : 「くにたちの年中行事 四季の祈り〈秋から冬へ〉」より転載

P5 (注)水の懇談会について

国立市では2009年に策定された「国立市水循環基本計画」の準備段階として、環境に関心のある市民やNPO団体、漁協、用水組合、農業者、事業者などに呼びかけ「(仮)水資源、水環境の懇談会」を2003年に立ち上げた。その後名称を「水の懇談会」と改め、国立市水循環基本計画に市民の暮らしに直結した意見や考え方を反映させるために様々な調査を実施した。その調査の内容をまとめたものが「くにたちの水循環市民プラン - 水循環基本計画策定に向けた市民調査と提案 - 」である。